

劇映画『長良川スタンドバイミー一九五〇』という夢風船

松田 悠八（岐阜市出身）

二〇〇四年に小島信夫文学賞を頂いた拙作『長良川スタンドバイミー一九五〇』を映画化しようという話が、去年持ち上がった。物語は、昭和二五年前後の小学生当時に遊び回った長良川のこと、柳ヶ瀬に出没したオトコオナナのシヨーチャンのことなどを、記憶の奥底に眠っていた懐かしい岐阜訛りをたっぷり使って描いたものである。

世界中が大不況の嵐に見舞われているというのに、億単位の資金を要する映画なんて出来っこない、はじめは笑った。しかし、こういうご時世だからこそ、高らかに夢風船を揚げるべきだという声も聞こえてくる。うろつろしているうちに、東宝映画出身の監督松本正志さんが一気にシナリオを書き上げた。松本さんは、ぎふ中部未来博や花フェスタ等の映像監督で岐阜ちゅうを飛び回ったことがあり、岐阜の隠れた風景や知られていないロケ地をよくこ存じて、長良川が主人公となる映画の監督には打って付けの人物である。小島賞の選考委員で、作家でも

ある青木健さんが地元のプロデューサーとして動くことになった。青木さんは、長良川流域の市長や地域に根ざす企業の長を説得して回る優れた手配師でもあるのだが、慣れない資金集めの仕事では苦勞が絶えない。

折しも、朝日新聞の人気投票で、長良川は全国でも一、二を争う清流として人気があることが証明された。千年の歴史に彩られる鶺鴒を世界遺産に、という取り組みもはじまったという。『長良川…』を読んだ他県の読者から、自分の故郷とまったく同じだという感想も届いている。長良川は堂々たる全国区であり、誇り高い川なのである。ならば夢を追いかけてみるか。実現すれば『おくりびと』が秋田を元気にしたように、『長良川…』も岐阜に大きな刺激をもたらすかもしれないから。

——明日を見失ったらさがることを思うとよい。見慣れた山と川に希望がある。



「1950年頃、長良川で遊んでいた子どもたち。みんな痩せているが、素晴らしい笑顔ばかりである。」

松田 悠八（まつだ ゆうはち）

《略歴》

\*作家。昭和一五年岐阜市生まれ。長良小学校、長良中学校、岐阜高校から早稲田大学文学部入学。  
卒業後、出版社勤務を経て作家活動に入る。著書に『長良川スタンドバイミー一九五〇』（作品社）、『田舎流し』（富山房インターナショナル）がある。  
東京作家クラブ会員。東京在住。